

茅 風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2025年7月15日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 75号



野焼き(4月27日) 撮影:笹岡 達男

2024.3月中旬～2024.7中旬の活動報告

【3月中旬以降】

- 12日 『茅風』74号発行
- 16日 幹事会(リモート)開催。総会、20周年、野焼き等の準備について打合せ。
- 21日 群馬県庁で開催された森林ビジネス・森林空間サービス展示会で、北山塾長がリトリートや青水の活動について発表。

【4月】

- 5日 総会前に幹事会開催。総会の運営や20周年の日程について最終打合せ。
- 5日 2025年度総会を開催。会員19名、委任状13名の32名が出席し、新年度の事業計画や役員構成等を決める。続いて、20周年意見交換会が開催され、4グループに分かれ討議した。終了後、懇親会を開催。
- 25日 幹事及び20周年委員他が上ノ原に前日入り。野焼き及び記念行事の準備作業実施。
- 26日、27日 定例活動①「上ノ原の野焼き」実施。一日目35名、2日目は57名が参加。一日目は防火帯整備と野焼き講習会を実施。終了後は続いて記念行事を開催。2日目は天候に恵まれ、残雪を除き予定の区域を焼くことができた。

目 次

- 3月中旬～7月中旬の活動報告(事務局).....1
- 第24回定期総会開催報告.....2
 - ◆2025年度基本方針及び年間行事予定ほか
 - ◆2025年度の役員構成
 - ◇20周年意見交換会
- 2024定例活動⑧.....4
 - 「冬の自然観察と雪原トレッキング」
 - ◆開催報告(河辺 穂奈美)
 - ◆感想文(須藤 匠)
- 2025定例活動①「茅場の野焼き」.....5
- 「森林塾青水20周年記念式典」.....5
 - ◆開催報告(藤岡 和子)
- 麗澤中学校樹木観察会.....10
 - ◆実施報告(西村 大志)
- 2025定例活動②.....11
 - 「野を食らう」
 - ◆開催報告(藤岡 和子)
 - ◇茅場の植物調査(河辺 穂奈美)
 - ◆感想文(白井 香子)
- 藤原だより(北山 郁人).....13
 - 「明川棚田再生プロジェクト始動」
- こもんずの広場(上原 健).....14
- 編集後記(敬称略)

- 26日 午後2時30分より「みなかみ高原ホテル200」で20周年記念行事として報告会・記念講演・シンポジウムを実施。会員や招待者61名が参加した。「感謝の集い」では、感謝状を贈呈の後、48名の参加者が懇談し、交流を深めた。

【5月】

- 6日 20周年委員会(リモート)を開催し、20周年記念誌の活用方法など協議した。
- 17日 麗澤中学校「ゆめプロジェクト」樹木観察会の下見に、西村幹事他計5名参加。
- 24日 麗澤中学校「ゆめプロジェクト」樹木観察会に、青水よりインストラクター13名が参加。10グループに分かれ五感を使って生徒を指導。
- 5月24日 樹木観察会終了後、柏市内で幹事会開催。20周年記念誌の関係者への贈呈や6月プログラムについて協議。

【6月】

- 5月31日、6月1日 定例活動②「野を食らう」実施。会員・会友12名参加。
- 22日 幹事会(リモート)開催。20周年関係、会員動向、7月プログラム等について協議。

【7月】

- 7月12日、13日 定例活動③「茅場の防火帯整備」に13名参加。(詳細は次号で紹介)

■第24回「定期総会」開催 —20周年に向けてのグループ討議も実施— 報告 稲 貴夫

4月5日、第24回定期総会を渋谷区の地球環境パートナーシップで開催しました。

総会には会員19名が参加。委任状13名と併せて議決権のある会員数54名の過半数となって総会は成立。北山塾長の挨拶(写真・右上)の後、笹岡顧問が議長に選出され、議事が進められ、前年度の事業・収支報告、2025年度事業計画・予算案、役員選任の提出議案はすべて承認されました。新年度の重点取り組みは



以下の表に示す通りですが、野焼きの効果の検証実験や、OECM、自然共生サイトの登録、認定などについて、熱心に質疑が交わされました。

2025年度の事業は、別掲の年間行事予定表の通りです。特に、「植生調査」については専門家の指導のもと継続してゆくとともに、茅場の保全については、茅刈りの担い手育成や技術の向上、山菜採取と雑草の駆除、茅の種の採取・販売など多様な側面からの活動プログラムとなっています。

また、役員選任については、草野洋前塾長が幹事を退いて顧問に就任。同じく松澤英喜幹事が退任し、今後は一般会員として活動。そして、今年度から河辺穂奈美会員が幹事に就任することとなりました。役員選任が了承された後、草野顧問、松澤会員、河辺幹事がそれぞれ挨拶して、総会は終了しました。

2025年度基本方針及び重点取り組み・年間行事予定・役員体制

基本方針

多様な人々が飲水水源の志でつながり、生き物たちにぎわう上ノ原の「入会の森(茅場・ミズナラ林)」を持続的に保全・利用していく。

- ・20周年記念誌の発行と20周年記念行事の実施
- ・茅場の適切な管理として、野焼きが確実にできるように体制を整える。野焼きの効果の検証実験を行う。
- ・茅刈技術の向上により、出荷する茅の品質の向上と、安定的な販路確保をめざす。
- ・世界で進められている生物の多様性を保全する仕組み(OECM、自然共生サイト)への登録、認定をめざす。
- ・ホームページをリニューアルし、ユネスコエコパークとしての上ノ原の価値を幅広くアピールしていく。

目的	ベースの活動	具体的な取り組み
茅場保全と活用	野焼き	毎年確実に野焼きが出来る体制づくり 野焼きの効果の検証実験
	茅刈り・運びだし	茅刈りの担い手の育成と茅刈り技術の向上
	茅の販売	茅の商品としての品質向上、安定的な販路開拓 茅の種採取、販売
ミズナラ林保全と活用	二次林の若返り間伐と資源の活用	自伐型林業との協働と利用促進
		間伐の推進、薪、木炭、木製品など製品化 リトリートプログラム活用
調査研究	生き物調査	専門家の指導をうけての植生調査 センサーカメラによる生き物調査(NACS-Jとの連携) 希少種等の栽培技術の研究
環境教育	藤原小学校との協働	希少植物の栽培などを通じた環境教育
	学校団体等の受け入れ	麗澤中学校、その他武蔵中学校など
社会貢献・地域貢献	環境資源の発掘、掌握、アピール	草原の里100選、重要里地里山500、モニタリングサイト1000、昆虫等保護条例指定地、SDGsを意識した活動 NACS-Jと連携したOECM、自然共生サイトへの登録
活動基盤維持強化	担い手の体制強化	執行部の体制強化
	担い手層の拡充	茅刈新規参入者の促進、自伐型林業の研修参加者への働きかけ(前年度から継続)
	関係団体との連携	大学など教育機関との連携、働きかけ 茅葺き文化協会のチャンネル活用
普及啓発	広報、PR活動	記念誌の配布と活動のPR
		ホームページ、SNS等による情報発信
		町報、回覧板、県広報等によるPR
		記帳台の活用による、山菜取りなどの茅場利用者への広報、PR

◆2025 年度の主な活動計画・日程について◆

総会後の変更、追加を反映しています。参加申込みの際は必ず事前にホームページ等でご確認下さい。

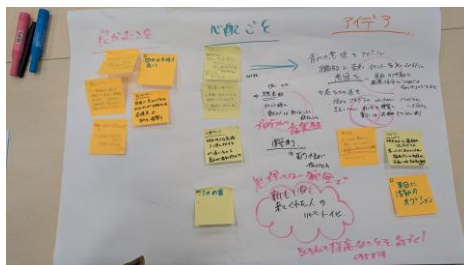
月	主な活動予定 ①～⑧は定例活動
4	総会・セミナー/5(土) 20 周年記念行事/26(土) ① 野焼き・山の口開け/26(土)～27(日)
5	麗澤中学校樹木観察会/24(土)
6	②「野を食らう」/5 月 31(土)～6 月 1(日)
7	③ 茅場の防火帯整備/12(土)～13(日)
8	予定なし
9	連携先訪問「日光茅ボッチの会」他、期日未定
10	④ ミズナラ林整備と茅の穂採取/4(土)～5(日) 地元による茅の穂採取/上旬～中旬 麗澤中学校奥利根水源の森林フィールドワーク/22 日(水)
11	茅刈り合宿/11 月上旬 ⑤ 茅刈り/26(土)～27(日) 地元による茅刈り/10 月下旬～11 月中旬 ⑥ 茅出し、山の口終い/29(土)～30(日)
12	活動予定なし
1	流域連携活動、小貝川・菅生沼の野焼き/11(日)、12(月・祝)
2	活動予定なし
3	⑦ 冬の自然観察と雪原トレッキング/7(土)～8(日)
時期未定	茅ユーザー交流 楽習会(首都圏部会による流域連携活動)
通年事業(行事の中で随時実施予定の活動等) ・植生調査 ・希少種の育成、生育状況モニタリング ・NPO 奥利根水源地域ネットワーク側面支援 ・自伐林業との相互交流 ・茅の販路開拓 ・全国草原再生ネットワーク等 ・連携団体への上ノ原来訪・利用呼びかけ	

20 周年意見交換会を開催

20 周年記念行事を控え、今年恒例の総会セミナーに代えて、青水の 20 年を振り返り、今後の活動について考える意見交換会を開催しました。

参加者は 4 班に分かれて、討議を行い、模造紙と付箋紙を使って意見を整理。最後に各班の代表が発表しました。

世代交代の時期を迎え、活動内容だけでなく、地元や関係団体との交流や連携、運営上の改善点など、様々な意見が出されました。



◆2025 年度の役員構成◆

～塾長・事務局長・幹事・顧問・相談役等紹介します～

※下線は新任 PGM: プログラム

塾長 北山 郁人

全般統轄

みなかみ事務所長(地元・みなかみ町役場ならびに支援企業との連携、資材等管理)

副塾長 藤岡 和子

塾長補佐、必要に応じて代行

全般にわたる企画 児童青少年の教育 PGM

事務局長 稲 貴夫

全般にわたる管理、全般統轄補佐

下流部会統轄・東京楽習会・流域連携、総会/セミナー、「茅風」編集長、会計監査

幹事

稲 千賀子

麗澤中補佐「樹木観察会/FW」、下流圏 PGM 補佐、総会/セミナー補佐

尾島キヨ子

麗澤中補佐「樹木観察会/FW」、下流圏 PGM 補佐、総会/セミナー補佐

西村 大志

学術面でのサポート、学識者・研究者との連携、助成事業、広域連携補佐(草原再生ネット、草原サミット)、麗澤中(統括、窓口) WEB 管理(HP・ブログメンテなど)補佐

藤岡 貴司

事務局長補佐(予算管理、会員名簿管理、総会ほか)

河辺穂奈美

会計・出納

柳沼 翔子

現地活動塾長補佐、プログラム企画開発、広報、WEB 管理

吉野 一幸

地元代表、地元の活動参加促進、地元情報発信

顧問

安楽 勝彦

川端 英雄

草野 洋

笹岡 達男

清水 英毅

滑志田 隆

相談役

雲越 萬枝

林 親男

みなかみ町担当窓口 環境課

河辺穂奈美新幹事一ロコメント

今年度より会計を担当いたします、河辺穂奈美と申します。

2017 年野焼きの初参加以来、上ノ原は私にとってワクワクと安心のフィールドです。これからは少しでも気を引き締めて、でも変わらず楽しむことをだいにし続けたいと思います。至らぬ点もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

■2024定例活動⑧ 雪原トレッキング —雪とうどんを踏みしめて—

報告 河辺 穂奈美

3月8～9日、2024年度最後のプログラム「雪原トレッキングと自然体験」を行いました。大雪のニュースで藤原の様子が度々報じられたことが良い宣伝になったのか、雪原イベントとしては過去最多の25名が集まりました。上ノ原手前の駐車場まで上がると、両脇はカーブミラーがすっぽり埋まるほどの雪の壁。これは歩き甲斐がありそう…！各々スノーシューやかんじきを装備し始めます。北山塾長の愛娘、藤原育ちのル



ナ師匠によるかんじき履き方講座も催され、皆足元の不安無く大幽洞を目指します。

沈まない足を手に入れたら、真っ新な雪を踏みたい衝動は抑えられません。さっそく思い思いの大きな足跡が雪原に^{ちりば}められます。序盤は平坦だから、まだ大丈夫。シジュウカラの声に耳を傾けたり、ドライフラワーになったツルアジサイにときめいたり、セッケイカワゲラの型破りな生き方に驚いたりしながら歩けば、ウォーミングアップ完了です。いよいよ登りが始まると、素直に前倣えで進みます。最後に待ち構える急登は、2班に分かれてアタック。前半チームは深い雪に埋まりながら全身で前へ前へと道を切り開き、後半チームはスノーシューの刃が立たない程に踏み固められた道に食らい付いてよじ登ります。それぞれ筋肉痛の部位が違ったことでしょう。



登坂から最後の急坂へ。登り切った先にあるのが、氷筍のできる洞窟「大幽洞」



ついに辿り着いた洞窟の中には、ヒョロヒョロもやしっ子の氷筍が大勢並んでいました(写真・左)。塾長曰く、気温が低いと水滴が凍るのが早い

ため、細長い形になるとのこと。毎年異なる姿で迎えてくれる氷筍たちは、その冬の天候を敏感に受け取って表現してたんですね。

帰路は恒例の尻滑りでスタートし、勢いそのままあっという間の下山でした。無事に予定通りのトレッキングを終え、日帰り参加の5名を見送って民宿並木山荘へ戻りました。



上は北山塾長手配のスウェーデントーチ、左は今年も時間のない中こしらえた藤岡副塾長の作品

夕食を戴いた後、希望者は「藤原雪まつり」を見学すべく藤原スキー場へ。入り口の雪灯りとステージを囲うスウェーデントーチの温かい光が、凍える指先や目や背筋に染みしました。真っ暗なゲレンデを背景に、今年も「GOROPIKA」のファイヤーショー(写真・右)で盛り上がり、大きな打ち上げ花火が真冬の澄んだ空を彩りました。



二日目は、初めての「藤原盆でうどん作り」。民宿関ヶ原からお借りした栃ノ木の「藤原盆」は、囲炉裏の煤で真っ黒になっていた表面を削り直したそうで、木目が煌めいてとても素敵です。藤原盆のカタチの特徴は、底の一部が斜めにカットしてあること。これにより盆を手前に傾けながら、力を込めて生地を捏ねることができます。次に登場した古民具は、なんともレトロで可愛い「手回し製麺機」。かつて藤原集落では家族でうどん作りをする習慣があり、一家に一台は必ず製麺機を持っていたそうです。まずはラップのような挿入口から生地を入れてハンドルを回し、平らに伸ばしていきます。折りたたんで伸ばしてを何度か繰り返したらギアチェンジ。今度はギザギザのローラー部分に伸ばした生地を挟み込んで再びハンドルを回すと、細めのうどんがにょ～っと出てきました！た、楽しい！

大量生産された「藤原うどん」は、程よい弾力とつるつる食感でお店にも劣らない味わい。生地を捏ねたり踏ん

だり伸ばしたり具合によって微妙に歯応えが違うのも面白く、皆席を立ててあちこちのザルに手を伸ばし、食べ比べを楽しみました。次回は上ノ原の山菜と一緒に戴くのも、ありですね～。



藤原うどんが出来るまで
捏ねて、踏んで、寝かして、
広げて、切って、製麺機へ

ながら、「この虫は何のために生きているのだろう」という思いが湧いてきました。

その時、自分も雪の上をのそのそと歩いていました。「何のため？」の答えになるような意味や価値、生産性のようなものは特に浮かんでこず、ただ雪が降った山の中を歩いているだけです。でも、息を荒くしながら歩いていると、自分の普段の生活で過ごしている多くの時間にはあまりない、何かに集中して没頭している時のような心地よい時間に感じました。

大幽洞窟の氷筈など、珍しい景色を見られたのも印象的でした。洞窟の手前にある登るときには大変苦労した急な坂を、降るときには滑り台のようにズズッと滑って降りた場面は、思いがけず楽しい経験となりました。簡易なソリを持っている人が少し羨ましかったです。雪山を登って降りて帰ってくるという時間を過ごす中で、自分の感覚を何か感じられる時間を持てたような気がしました。



冬の上ノ原

参加者感想 「なぜ、雪原を歩くのか」 須藤 匠

茅刈りに参加したことのある友人の紹介で参加させていただきました。スノーシューとかんじきが用意されており、履き方を教えて貰って初めてかんじきを履くことになりました。山から降りる際に脱いで歩いてみたところ、雪の中に足がズボズボと埋まってしまう、かんじきを履く効果を実感しました。

スノートレッキング自体も初めての体験で、雪原となった上ノ原や山道を歩くのはとても興味深いものでした。歩くのが大変で下ばかり向いて歩いていることに気づき、「せっかくなので」と顔を上げて歩こうと思いましたが、足元に昆虫がいることを教えてもらい、再び下を向いて歩くことになりました。

真っ白で何も無いように見える雪の上に、黒くて細長い虫がいて、それが「セッケイカワゲラ」(写真・右側上)という名前だと教わりました。この虫は生まれた川の上流に向かって歩いているのだそうです。その様子を眺め



■「森林塾青水 20 周年記念式典」 ■2025 定例活動① 茅場の野焼き 報告 藤岡 和子

ープロローグー

群馬県みなかみ町藤原上ノ原の旧入会地で 40 年ぶりに野焼きを復活してから 20 年の節目の 2025 年 4 月 26、27 日、20 周年式典と野焼きを実施しました。

2014 年の夏から青水に関わってから 10 年、青水のちんどん屋みたいな私が、今や副塾長に就任しています。式典準備のため、実行委員は前日の 25 日から藤原入りしましたが、式典会場の入り口が寂しく、『ボッチ(茅束)生け花』を制作しました。

昨年作ったニュウ(乳)が上ノ原にある！杉の青っ葉、蕨の薹、桜の花で生けました。その後は宿の「吉野屋」で、明日の準備と打ち合わせです。

ボッチ生け花と、昨年の茅出しの際に作ったニュウ。



そして式典当日の26日を迎えました。

私は、新幹線と在来線を利用する参加者のアテン
ドのため、マイクロバスに添乗。その中には、初代
塾長清水さんや、高齢のため数
年前から藤原を下り街で暮ら
している藤原の生き字引、林親男
さんもいます。車中では親男さ
んから、「みなかみ語り」を伺
いました。(写真・右)



古道の話。山の木を筏にして
流した利根川の話。親男さんが指差す山の石で奈良
俣ダムの石組みをした話。みなかみは、雪解けの水
流を活かしてラフティングのメッカとなっているが、
そのエネルギーは、水力発電にも使われていること。
谷川岳を見ながら馬の背の話—雪解けてできる馬の
姿を見て、春まきのタイミングを計っていたそう。

道中から見る車窓のあちらこちらに、生活様式
の変貌を語る歴史が散りばめられていました。自然と
暮らしが一体であった証です。

途中、靴を取りに親男さんの自宅前にバスを停め
ました。戻って来た手にはアブラチャンのかんじき
が。「いるか？」思いがけないプ
レゼントです。来年の大幽トレッ
キングはこれで登ろう！！

私が喜んでいると、親男さんが
耳打ちします。

「大幽(洞窟)の氷筍って知っ
てるか？」

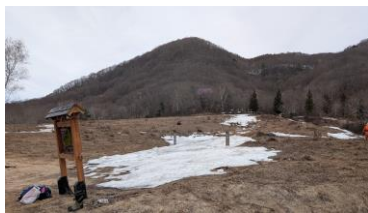
私が頷くと

「ありゃ〜凄いだろ。あれは俺
が見つけたんだ。初めて見た時は、そりゃあ、びっ
くりさ。2時間は動け
なかった。」

初めての参加者も、
きっと親男さんの虜
になったことでは
しょう。ほんわか楽しい道
中もここまで、まだ雪
の残る上ノ原に到着しました。(写真・上)



大 幽 洞 窟



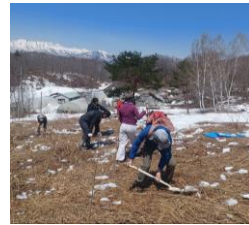
一野焼き事前作業一

マイカー組も上ノ原入会地に集合し、明日の野焼
きの準備を始めました。

今年は、移住16年目の
塾長も初めて経験する程
の積雪量で、3日前の上ノ
原は、まだ一面が雪でした。
(写真・右) 久しぶりに雪間
の野焼きとなるとの見立
てのもと、野焼き予定地に除雪機が入り、晴天によ
る雪解けも相まって、予定地の三分の二は焼けそう
です。



野焼きにする
ための鉄則で
す。今年は、
雪間の野焼き
になるので刈
り払いはいし
ません。スコ
ップ隊が、焼



スコップ隊(上)と
レーキ隊(右)



きたい箇所には島状に残っている雪を、防火帯にしたい箇所、雪の解けているところに運んで、雪の防火帯を作りました。

レーキ隊は、夏に草を刈った防火帯の可燃物の除去を徹底して行いました。レーキの使い方はもう一つ。3日前まで雪に覆われていた草原の湿った枯れ草は、雪の重みで地面にへばりつき、燃えにくい状態です。それを毛羽立たせて、燃えやすくする作業もしました。

一野焼き復活21年目の点火式一

上ノ原では茅場11ha
を3分割して、3年周期
で焼いています。今年は
残雪のため、三分の一の
更に三分の二を焼きます。
防火帯作りは例年より作
業量が少なく、時間に余
裕が出来ました。



今年は十郎太沢右岸(写真左側)を焼く

そこで明日の練習も兼



ねた野焼き講習会に併せて、20周年記念点火式を行うことにしました。

着火は、初代塾長清水さんと二代目の草野さん。草野さんはしっかり清水さんのサポートにまわります。(写真・左) 点火式で焼いた箇所は、広場右側の十郎太沢との間の細長いエリアです。(写真・左下) その焼け跡が、明日広場を焼く時の防火帯になります。



広範囲を安全に焼くことが出来るんです。」さすが我が野焼きの師匠の熟練の技と知恵です。(写真・右中央が増井師匠)

昼食後、鎮火確認をしっかり行い、式典会場へと移動しました。



準備の要は、防火帯をしっかり作ること。安全な

ー森林塾青水 20 周年記念式典ー

【プログラム】

開会式 14:30～

主催者・来賓挨拶

第一部 報告会 14:45～

『20 年の振り返り』

藤岡和子(副塾長)

『上ノ原植物調査』

小幡和男(茨城県霞ヶ浦環境科学センター)

第二部 記念講演とシンポジウム 16:00～18:00

講演『流域コモンズという先見の知』

西廣 淳(国立環境研究所気候変動適応センター)

シンポジウム『上ノ原の未来に向けて』

コーディネーター

笹岡達男(全国草原再生ネットワーク理事)

パネリスト

朱宮丈晴(日本自然保護協会)

町田守俊(町田工業社長)

北山郁人(森林塾青水塾長)

第三部 感謝の集い 18:30～20:00

感謝状贈呈・乾杯・関係者スピーチ

※第一部、第二部はカンファレンス棟、第三部はホテル棟で開催

当日、式典担当の実行委員は朝から受付や会場の準備を進めていました。会場の「みなかみ高原ホテル 200」カンファレンス棟にバスで到着すると、ボッチ生け花が参加者をお出迎え。一階で受付を済ませ、二階で着替えて三階の式典会場へと向いました。

柳沼翔子幹事の司会(写真・左)で、開会式が予定通り始まりました。北山塾長の

主催者挨拶、みなかみ町田村義和教育長の来賓挨拶が終わり、いよいよ第一部報告会です。



開会式で挨拶する北山塾長



来賓挨拶する田村教育長



写真で報告する藤岡副塾長



小幡さんの植物調査報告

トップバッターは副塾長である藤岡の「20 年の振り返り」。人生初のプレゼンでしたが始めの緊張どこへやら、写真を使って開き直ってやり遂げました。

私の番が終われば、後は素晴らしい話が続きます。

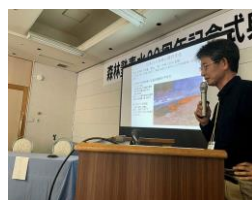
ナンバンギセルの花びらのヒダの話を、目を輝かせて語る小幡さん。ジャワ原人か



上 会場風景
右 阿部賢一
みなかみ町長
もかけつけて
挨拶



らネイチャーポジティブまで自然と人類の壮大な歴史を、青水の活動に当てはめて語る西廣さん。上ノ原の未来に向けて、登壇者各専門の視点から意見を出し合ったシンポジウム。3 時間の贅沢すぎるその濃さに頭一杯、胸一杯でした。



上 基調講演で話す
西廣淳さん
右 シンポジウム
「上ノ原の未来に
向けて」右から笹
岡・朱宮・町田・北
山の各氏



シンポジウムが終了すると、会場を移動して 20 周年第三部の「感謝の集い」です。



草野前塾長による開会挨拶に続いて、北山塾長より林親男さんに感謝状が手渡されました。その後、木村伸介さんの発声で乾杯。会場はなごやかな雰囲気の中で思い出話に花が咲きました。(写真・上)

集いは安楽顧問の先導で万歳が三唱され(写真・下)閉会となりましたが、語りきれなかったところは、各部屋での二次会へと引き継がれてゆきました。

尚、集いに参加できなかった雲越萬枝さんには、翌日北山塾長が自宅に出向いて感謝状を贈呈しました。



ー山の口開け神事ー

27日朝、野焼き本番前に、十二様に一年の入会仕事の無事を祈願しました。

お神酒や果物などをお供えした十二様に北山塾長が祝詞を奏上しました(写真・右)。続いて、楽の奉納で藤岡が唄わせていただきました。楽曲はアフリカス族の歌で、ジャンベ(太鼓)は夫(貴司)です。(写真・左下)



デュニヤマハタマ デュニヤマ
=和訳=

世界はひとつ
ずっと
手を取り合っていこう
創始からいわれ続け守ってきた
地の神に感謝する心
何にでも自然界に叶わぬ
からこそ
共に生きること

ー野焼きー

「野焼きは陣取りゲームなんですよ」

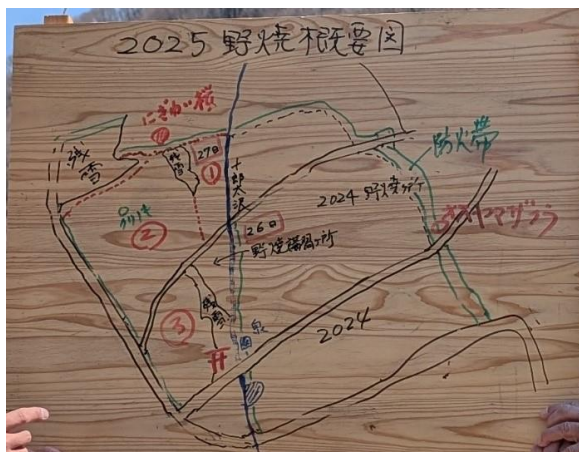
息子を抱き、炎を読みながら呟いた師匠である増井さんの前を、ジェットシューターを背負い走る。

三年前の野焼きに参加した女性から、「和子さんのように動けるには、どれくらい経験したんですか？」問われました。今年は着火でなく、水を背負うジェットシューターのみ。数えたら今年が7回目。女性が感じた私の『動き』は、経験回数は少ないけれど、一年目の2015年から火付け役に抜擢していただいた時から、その後3年間、火付け役とジェットシューターを兼任した年も、野焼き王子増井さんの側と一緒に動いたからこそ。問われなければ振り返ることのなかった気づきです。まだまだ素人ですが、野焼きレジェンド方の側で、これからも経験を積んでいきたい。

野焼き文化=火の文化が培ってきた生態系。季節仕事は1季逃すと365日後。式典での小幡さんの、上ノ原の植物の報告。西廣さんの、流域コモンズと火の文化の講演。茅場を一緒に守ってきた文化財の屋根を葺く町田工業社長の思い。そのお話を聞いた後の野焼き。一年後の重大さ、伝統を継承する大切さをひしひし感じました。



野焼きの手順を増井師匠が説明。①→②→③の順番で焼いてゆきました。微風快晴という絶好の野焼き日和でした。





野焼きの再開から丁度 20 年が経ちました。次の 20 年に向けて、引き続きご協力をお願いします。



野 焼 きの 至 言 集

—この時を経て、今の動きがある— 藤岡 和子

増井さんと走りながら学んだことをまとめました

- ◎ジェットシューターは火を消すだけではないんです。炎をコントロールする。それが楽しいんです。
- ◎火を着ける。炎は広がる側から野焼きは炭化していく。
- ◎焼きたい方向にある程度炎が移ったら、焼かないエリア方向の。ほら、その炎ですね。消すんです。すると、こっちから風が吹いて焼きたい炎を助けるんです。
- ◎あそこが危険ですね。あの木に火が移ったら森まで燃やしかねない。そのために、手前のもさっとした、そこ。灌木がばらついたところを一気に燃やしたい。
- ◎和子さんは、ここから、あっちに向かって、今までの感覚で着火して行って下さい。僕は、あそこまで行って、火を着けながら後から追いつきます。
- ◎僕が追いついたら、炎が高く揚がる前に急いで走りきります。
- ◎はい！走って！！
走りきり、防火帯から炎を見る。
背後から冷たい風が吹いた。
- ◎風を呼びました。これからです。
風をうけ、一気に立ち上がった炎は、勢いをつけて枯れ野を焼いていく。煙は渦を巻き中心に集まり、天高く上がった。
そして鎮火 一瞬だった。

はなしだけでなく、予測を聞き、実際に行い、そして事象を体感する。この体感は忘れない。

○記念本に請求書・支払い方法の案内を同封の上、お送りいたします。
尚、送料は実費のご負担をいただきます。

『茅風 Breeze from the field of thach-grass 森林塾青水の 20 年』

森林塾青水が、利根川源流域の群馬県みなかみ町藤原の皆様と共に、上ノ原の野焼きを復活して 20 年。その活動の歩みをまとめた本が刊行されました。

作成の経緯(副塾長：藤岡 和子) 2024 年。
10 年前 6 人いた藤原の茅刈り職人は、渡辺勇三さんお一人になりました。藤原の茅刈りは、藤原だけの唯一無二の技。とも縛りの技を失いたくない。私には、水たまりのアメンボほどの波紋しか起こせないかもしれないけれど、これからも上ノ原入会地を繋いでいくためには、今が動く時だと強く思いました。そして、まずは多くの人に知ってもらうことと考え、作成したのが本書『茅風 森林塾青水の 20 年』です。

多くの方々が関わってきた上ノ原。万葉の時代から続く上ノ原をそこはかとなく綴ったこの本を読むと、自然環境を守ることは、誰でもが日々の暮らしの中で関わっていけることなのだと感じていただけたと思います。青水の会報「茅風」に掲載した写真と文章を中心に 20 年を辿っています。上ノ原に集う人々が流した感動の汗と共に一緒に体感しましょう。

この機会に是非お求め下さい!!



B5 版カラー160 頁
定価 2,500 円



○氏名・部数・送り先を明記の上、下記の何れかの方法で、森林塾青水事務局まで、お申込み下さい。

メール：jimukyoku@commonf.net

F A X:044-543-8898(青水事務局長 稲方)

郵 送:〒379-1721 群馬県利根郡

みなかみ町藤原 3862-1 北山方

■麗澤中学校樹木観察会

—青水よりインストラクター13名が参加—
報告 西村 大志

5月24日土曜日、麗澤中学校1年生の樹木観察会を中学校構内で行いました。この樹木観察会は学校の「自分（ゆめ）プロジェクト」の一環で行われていて、「自分自身を見つめ、自分自身を発見する」ことがテーマになっています。森林塾青水がこの観察会をお手伝いしてもう10年以上になります。今年は、生徒165名、引率の先生11名、インストラクター13名が参加しました。



観察会は、「五感を使って感じる」「自分自身の気づきを得る」ことをコンセプトにしています。樹木の名前や自然の仕組みを知ることというよりも、あくまでそれは題材にして、自分自身で観察したこと、体験したことを大事にして、他の人と違っていい、自分自身の感性や学びを持ち帰ってほしいと思っています。麗澤中学校の広い芝生広場で、そんな話を生徒たちにもして、観察会スタートです。

生徒16～17名のグループに先生とインストラクターがついて、構内を回ります。観察会で扱う内容はある程度は決めていて、樹木の生き方の特徴や工夫について、例えば種子の散布方法や、樹木の成長方法、周辺環境との関係などについて、構内の題材を活用して観察・解説していきます。ただし、今年は年輪を観察できる樹木が少なく、ケヤキの伐採断面を持参しました。（写真・右）



インストラクターの視点で見ている印象的なのは、生徒たちが思いもよらない行動、考え、反応をすることです。例えば、例年観察会で一番盛り上がるのはヤブニッケイのにおいと味を確かめてもらうところなのですが、生徒たちに



地面を探索中

どんなにおい？どんな味？と聞くと予想外の答えが返ってきます。近年多いのは、バジルのにおい、次にシナモンのにおい。今年は、バジルが多くてシナモンといった子はほとんどおらず、味についても、甘いといった子よりもからいといった子の方が多かったです。毎年やっている身からすると、実際に味が変わっている気はしなくて、ニッキのような甘い味とすっとする香り、という「答え」を一応持っているのですが、それを「答え」として言うことはしません。あくまで参考としてこういう風にも言われているよと伝えるくらいにして、自分の感性を大事にしてもらいます。

観察会の後は教室に戻ってまとめをします。今年度、例年とやり方を変えた点として、観察中にメモ用紙を持たせないようにしていました。観察会の内容を覚えているだろうかと少し不安もありましたが、やってみるとそれは杞憂だったことがわかりました。むしろ、メモがなかったことで、植物の名前などの知識よりも、自分たちが体験したことや感じたことを自分たちなりに整理した発表が増えたように思います。



それぞれの体験や感じたこと

クラスでの終わりのあいさつでは、今日見た樹木や自然が季節によって変わっていくことを気にして見てみてほしいと伝えました。1回の観察会で伝えられる情報は少ないですが、

自分で観察して気づく感性があれば、数えきれないほどの発見ができるでしょう。秋のみなかみフィールドワークでも、たくさんの発見と素晴らしい体験をしてもらうことを楽しみにしています。



班ごとにまとめた「成果」を画面に投影して発表

■2025定例活動② 野を食らう —山菜と草花の恵みにあふれる2日間— 報告 藤岡 和子

野焼を終えひと月余り。上ノ原は、命芽吹き賑やかに香り立つ季節を迎えました。植物たちは、次の世代につなぐ子孫を残すために、生き生きと養分を吸収し成長していきます。その命の一部をいただくプログラムを5月31日～6月1日に行いました。



山菜採りを年間プログラムに組み込んだ理由は、コロナ禍で野焼きを2年中止せざるおえなかったことと、再開後も悪天候続きで十分に焼けなかったことで、茅刈りでは雑草と呼ばれる植物が増えてきたからです。梅雨に入る前、入会地で山菜を採り、食べることで夏に負けないからだをつくることは、屋根を葺き、家を守り、暮らしを次世代につないできた先人の日常でした。その当たり前を復活させること、この時期にススキ以外の草を採り活用することは、茅刈りの効率アップにもつながります。

1 日目

ワラビを採ろうとした矢先、ゴロゴロと雷が鳴りポツポツ雨も本降りになりました。一時車に戻り避難します。植物たちは暗天にも負けず、雨粒を纏い輝いていきます。雷が遠のいたところで、カップを着て草原に出ました。いつまた雷が鳴るか分からない天気なので、作業は広範囲に広がらず、広場からカラマツ林までの上段で行いました。雨の中での作業となりましたが、13人でコンテナ山盛りいっぱいワラビが採れました。



雑草の除去とワラビの採取 カゴ一杯採れました

＝ワラビの処理は採ってすぐ行うべし＝

15時、藤原の集会所『遊山館』に移動してワラビの処理を行います。ご指導いただくのは、3月の活動『雪原トレッキングとうどん打ち体験』でもお世話になった、並木山荘の小俣マチ子さんです。

灰汁抜き 重曹と木灰の2通り行いました。「重曹何g入れますか？」小俣さんに尋ねると「まあ入れてみて」と言いました。ワラビの収穫量や、その年の生育具合で重曹や木灰の分量は違ってくるのだそうです。長年毎年行っている経験がなせる技。ワラビにまんべんなくまぶしたところで、熱湯をヒタヒタまで注ぎ密閉します。10分後、食べてみて好みの味になっていたら、重曹や木灰を水で洗い流し、一晚流水に晒します。もちろん上ノ原まで運び、水守様が見守るなか十郎太沢の水に晒しました。



灰汁抜き 木灰(または重曹)をまぶし、熱湯を注いで密閉した後、水で洗い流し、十郎太沢の水で一晩晒しました

ワラビの塩漬け 野菜を入手することが困難な、雪国の冬の保存食です。

まず、ワラビの根元を揃えて輪ゴムで直径10cmくらいの束にくくります。次に、蓋付きの平らな発砲スチロールの入れ物にビニール袋を入れます。ワラビの向きを揃えて並べ、一列並んだら塩を約500gまんべんなくのせます。その上に今度は逆さに並べていき、塩を約500gまんべんなくのせます。これを繰り返し、最後は塩で終わめます(写真・下)。塩は2kg用意していました。「これじゃあ足りないね」と小俣の一言に、そんなに塩が必要なのかと、皆目を丸くします。副塾長が家に持ち帰って1kg追加しました。



宿泊でお世話になったのは『ロッジたかね』温泉のあるお宿です。湯舟に浸かれば、雨に濡れ冷えたからだに、じんわり染み込み癒されていきました。夕食は、しし鍋や豚巻きなどお肉料理が並びました。その美味しさとボリュームにお腹いっぱいです。

今回の車座講座は、副塾長藤岡 和子の暮らしの研究『野を喰らう』から、野の花種別に仕込んだ酵素シロップの味比べをしました。何を試食させられるかと、みんなおっかなびっくり舐めています。タンポポが美味しかったという人、スイカズラが美味しかったという人、ハナダイコンが好みという人、人それぞれ感想が違い、虫によって食べる草が違うように人間も違うものだなあと感じます。一旦上がった雨もまた降りだしました。明日の天気はどうなるのでしょうか。

2日目

小雨降る朝になりました。効率を考え、作業を3班に分けることにしました。

- ・昼食の天婦羅用の野草摘み班
- ・侵入木及び草の伐採班
- ・ススキの生育に与える野焼き効果と雑草駆除効果検証班

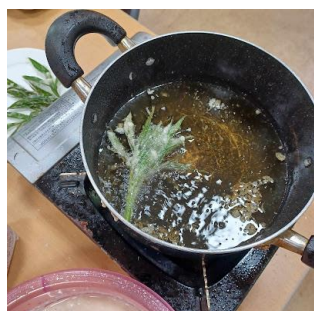
野焼きとススキ以外の草を抜くことが、どうススキの生育に効果が出るのかデータを集める1回目です。2m×2mを4分割。今年野焼きをしたところ、去年野焼きをしたところ、毎年野焼きをするところの3地点設置しました。この面積で十分なデータが取れるのか分かりませんが、今年の茅刈りまで月1回調査していきます。(詳細は別記)

昨日と同じ雨降る中の作業になりましたが、雷雲は発生せずシトシト雨。薪炭林内まで足を運び、ヤマブドウの新芽を採集しました。各班作業に没頭しました。



お昼の支度で遊山館に向かおうとすると「おや？」雨がやみ雲間から青空が覗いています。雨は、人が作業するにはいささか厄介ですが、植物たちには嬉しい雨。瑞々しい野草が摘めました。(写真・左)

天婦羅用に摘んだのは、ハンゴンソウ/アザミ/ヨモギ/ウド/フキの若葉/ヤマブドウの新芽/タンポポの花/7種。ご飯のお供にとノコンギクの醤油浸しも作りました。『ロジタかね』で握っていただいたおにぎりと共に、参加者13人でわいわい野を喰らいました。(写真・下)



■「茅場の植生調査」

—野焼き歴20年の草原で—

報告 河辺 穂奈美

侵入木の除伐と毎年の野焼き・茅刈を続け、今では美しいススキ草原になった上ノ原茅場。しかしここ数年は、低木や雑草が増えたように見えます。「べっぴんさん」な茅とはいえ、華奢で穂の無いススキも多いような…？

雨とコロナで何年もまともに火が入らなかったからだろうと思ったりもしますが、実際はどうなのでしょう。野焼きや、今回のイベントで実施した雑草取りは、茅場の質に影響するのでしょうか。体感ではなく、少しだけ真面目に調べてみようと思います。

茅場のなかに火入れ条件の異なる3つの調査地点を設定し、それぞれに除草条件の異なる1m四方×4つの実験区を作りました。(下の写真・図表参照)

調査は6～9月に

月1回、各地点・区画に生育する植物を調べます。毎回、区画①はススキ以外の全ての植物を取り除き、区画③はワラビだけを取り除きます。6月の調査では、区画②もススキ以外の全ての植物を取り除



調査地点

地点	野焼き
A	毎年実施
B	2024休止／2025実施
C	2024実施／2025休止

実験区

1m	
1m	1m
① 全て除草 6-9月各月	② 全て除草 6月のみ
③ ワラビのみ除草 6-9月各月	④ 除草しない (対象区)



野焼き&雑草駆除効果試験地の設置作業

きました。そして11月の茅刈の頃、それぞれの区画でススキの生育状況を調べて比較してみたいと思います。

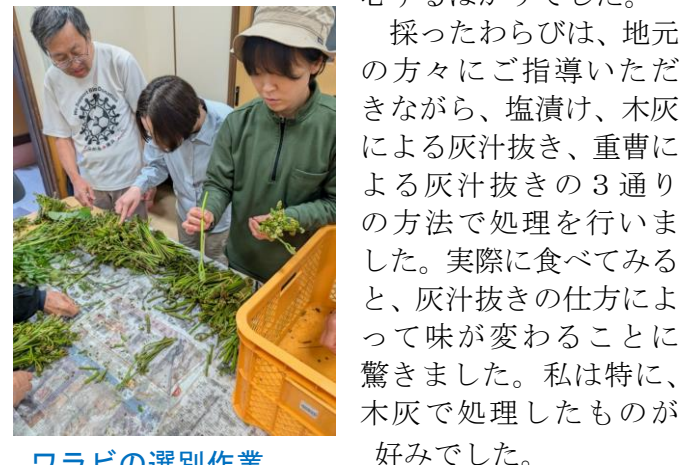
実験計画や調査方法など、見切り発進なところもあります。上ノ原茅場を守ってこられた諸先輩方、アドバイスをお待ちしております！

参加者感想「山菜採り体験を通して」 白井 香子

5月31日と6月1日の2日間、山菜採りの体験に参加させていただきました。

昼食を済ませススキ草原に到着。以前にも一度訪れたことがあったのですが、今回はススキが刈り取られた後だったようで、最初は同じ場所だと気がつきませんでした。

1日目はあいにくの雨模様で、時折雷も鳴る天候ではありましたが、雷の合間を縫って山菜採りへ。わらびをポキポキと採っていく作業が思いのほか楽しく、つい夢中になってしまいました。ふと顔を上げて周りを見ると、同じ時間で私の倍以上もの山菜を採っている皆さんの姿が。しかも、わらび以外にも様々な種類を採っておられ、その手際の良さに感心するばかりでした。



ワラビの選別作業

採ったわらびは、地元の方々にご指導いただきながら、塩漬け、木灰による灰汁抜き、重曹による灰汁抜きの3通りの方法で処理を行いました。実際に食べてみると、灰汁抜きの仕方によって味が変わることには驚きました。私は特に、木灰で処理したものが好みでした。

2日目も小雨の中で山菜採りを行い、途中からは空に晴れ間も見え、気持ちの良い時間を過ごすことができました。採った

山菜は天ぷらにいただきましたが、苦味はほとんどなく、ほんのりとした香りが感じられ、どれもとても美味しかったです。採れたての新鮮な山菜ならではの味わいだったのだと思います。

2日間を通して、自然の中での貴重な体験と、青水の皆さんとの温かい交流を通じて、多くの学びと楽しさを得ることができました。本当に素晴らしい時間をありがとうございました。



■藤原だより 「明川棚田再生プロジェクト始動」 塾長 北山 郁人

藤原地域では、高齢化の進行により耕作放棄地が年々増加しています。特に桜の里である明川の棚田は、残念ながらほとんど手つかずの状態になってしまいました。

この状況を打開するため、今年からホテルサンバードのスタッフと



連携し、「明川田んぼ再生プロジェクト」を地域のメンバーでスタートさせました！

これまでも、地元の学校団体向けの田植えや稲刈り体験を受け入れてきましたが、今年から東京の家族グループに棚田オーナーになってもらい、年間を通じて藤原地域に足を運んでいただくプログラムも始めました。

私たちの目標は、明川の棚田を全て再生させ、将来的にはホテルサンバードで提供するお米を自給することです。

今年の新米が収穫できれば、茅刈りの際に皆さまに販売できると考えています。ぜひ楽しみにお越しください！



「こもんずの広場」第6回
近況報告—嬌恋村から横浜に戻って1年半—
上原 健(うえはら たかし)

地域おこし協力隊の身分で3年間お世話になった嬌恋村の生活を後にして、2023年12月ホームタウンの横浜に戻りました。ただの年金生活者の私がその後何をして日々を過ごしているか、そんな個人的な報告で貴重な誌面を使ってしまうのはとても気が引けますが、笹岡さんからのご指名なので、皆さま、ご容赦くださいませ。

さて、この1年半を振り返ってみると、やはり大したことはしていませんね。

【口出し専門事務局】

【勝手に山守(やまもり)】

【今さら哲学】

【隙あらば昼飲み】

という日々(継続中)。

まずは【今さら哲学】【隙あらば昼飲み】という話

ここ半年くらい、月に数回、平日の昼間、間邊英さんと哲学の解説本(哲学書にあらず)を読んで、感想や思いをお互い吐露するという”読書会”をしています。私は難しいことからはずぐに逃げるタイプ、哲学もずっとスルーしてきたのですが、訳のわからない混沌としたこの世の中、”ネガティブ・ケイパビリティ(なかなか答えの出ない状況に耐える能力)”は必須だよね、そう思って、今さらですが恐る恐る哲学の解説本(哲学書にあらず)に手を伸ばした訳です。そんなことを上ノ原に向かう道中、運転席の間邊さんに話したことから読書会をやることになった次第です。

読書会はしばしば飲み屋での延長戦へ。平日の昼



間でも飲める所はいくらでもありますから隙あらば昼飲みです。高齢者には明るいうちに飲む方が安全、ということで同級生も皆仕事をリタイアして暇を持て余している今、集まりももっぱら昼飲みです。川端英雄さんとの約束もすぐまとまりました。真面目にお仕事されているお仕事現役の皆さま、申し訳ございません。

次は【勝手に山守】という話

山と言っても住宅地に囲まれた横浜の里山ですが、30ヘクタール以上あります。何年か前に清水英毅さんと藤岡和子さんをご案内したこともありました。愛機(一眼レフカメラ)と草刈り鎌、剪定鋏と鋸、

移植ごてなど大荷物を背負って、多い時は週の半分通っています。目標は”美しい里山景観と生物多様性の両立”、その目標に偽りはないのですが、人さまの土地をさも自分の庭のようにいじくっているだけと言われればその通り。地主の皆さんには本当に感謝しています。ただ、私も地主さんも歳を重ねマンパワーが落ちています。行政、地域と連携して手入れが続けられる仕組みを作らねばなりません。青水の活動を見習いたいと思います。ついでに言うところでは野焼きをしたい!密かな野望です。



足繁く通う里山はクジュウツリスゲの神奈川県唯一の生息地。探せば上ノ原にあるかもしれません。

そして【口出し専門事務局】という話

縁あって、”ガーデンキュレーター協会”の立ち上げに関わってしまいまして、事務局長を拝命しています。もちろん有能な若者を有給で雇えるようになるまでのボランティアです。ちなみに、発起人である会長の小島理恵さんと塾長の山本紀久さん、お二人とも、私がお誘いして上ノ原の野焼きに参加されています。ガーデンキュレーターについてはネットで調べていただければ幸いですが、簡単に言うと、公園、庭、緑地、里山など人が関わる”緑”の質を高めよう、そのためにランドスケープ・造園業界の仕事の進め方を改めよう、というムーブメントです。私は全くの門外漢ですが、かつて環境プランナー制度の立ち上げに携わった経験を買われ、組織の法人化とか、その理念とか資格制度のこととかについて、口だけは出しています。今後、地域資源の活用という切り口で森林塾と”ガーデンキュレーター、何らかの協働ができればと夢想しています。

編集後記

『茅風75号』をお届けします。

上ノ原の野焼き復活から20年の節目にあたり、4月26日に開催した20周年記念式典。本号では、前後の日程で実施した野焼きと併せて、その概要を藤岡副塾長の熱い報告記事でお伝えしています。また、『茅風 森林塾青水の20年』の紹介も掲載しました。ご希望の方は、是非この機会にお求め下さい。次号では、記念講演やシンポジウムなど記念行事の詳細をお届けする予定です。青水の20年を支えていただいたすべての皆様に感謝申し上げます。(貴)